

京都市立芸術大学移転整備基本構想策定業務等
第3回 西京区・洛西地域の新たな活性化懇談会 議事録

2015年3月25日

1 日時

平成27年3月25日（水） 13時～15時

2 場所

ホテル京都エミナース「金閣の間」

3 出席者

懇談会委員

会長	小石 玖三主	西京区自治連合会会長
会長代理	片山 千恵子	新林学区社会福祉協議会会長
委員	江村 寛計	京大桂ベンチャープラザ ビジネス・インキュベーション・コーディネーター
〃	城戸 俊明	京都おやじの会副会長，大原野おやじの会
委員 (アドバイザー)	高田 光雄	京都大学大学院工学研究科教授
委員	富田 千果子	京都市立西総合支援学校 学校運営協議会副会長， 人づくり21世紀委員会西京区世話役
〃	中谷 香	西京区洛西支所地域力推進室長
〃	長谷川 一樹	行財政局総務部長
〃	南 寛	公立大学法人京都市立芸術大学事務局長
〃	入木田 浩幸	国際日本文化センター 管理部総務課長
〃	村上 薫	大枝学区自治連合会会長
〃	村下 恒雄	NPO法人らくさいライフスタイル代表
〃	森 紳二郎	高島屋洛西店店長
〃	安枝 英俊	洛西ニュータウン創生推進委員会アドバイザー

4 議事概要

(1) 今後の懇談会の進め方について

会長：

- ・ ただ今から「第3回西京区・洛西地域の新たな活性化懇談会」を開催する。なお、八木委員は本日欠席との連絡があった。
- ・ さて、前回の第2回活性化懇談会では、今後の進め方や検討テーマについて議論した。本日は、前回の議論を再確認するとともに、今後、具体的な方策を検討していくプロセスなどについて議論したいと考えている。まず、資料について事務局から説明をいただき、その後で、意見交換に入りたい。

事務局

ー事務局より資料2に基づいて説明ー

- ・ それでは、資料2の「第3回懇談会にてご議論いただきたいポイント」を見ていただきたい。
- ・ 1点目は、今後の進め方について。前回の懇談会でお示した「進め方(案)」について再度確認をさせていただく。
- ・ 2点目は、今後の懇談会での検討テーマについて。これも、前回の懇談会で議論いただいたが、住民円卓会議での御意見などを改めて説明させていただくので、それを踏まえて、検討テーマを設定していただく。
- ・ 最後に、3点目は、具体的な方策の検討になる。設定された検討テーマについて、具体的な方策の議論ができるよう、もう一段階テーマを絞り込む作業をお願いします。この絞り込んだテーマをもとに、来年度以降、具体的な活性化策を検討していきたいと考えている。それでは、資料に基づき説明させていただく。
- ・ 1点目の「進め方(案)」について確認する。資料2の3ページに示すように、平成26年度の議論を踏まえ、平成27年度にテーマ別の検討を行い、年度末に中間報告を行う。平成28年度ではまちづくりの方向性についての議論や活性化ビジョンの取りまとめを行う予定となっている。
- ・ 2点目の「今後の懇談会での検討テーマ」について説明する。資料2の5ページに示すように、第2回懇談会での「住みたい」や「来てもらおう」といったキーワードを踏まえ、2つの検討テーマを事務局の案として設定している。テーマ1が「定住・活動」、テーマ2が「交流・活動」である。
- ・ この検討テーマ設定の流れについては、前回の懇談会でも説明したが、改めて説明する。まず、資料左の「円卓会議の御意見概要」は、今後の検討テーマ(案)を設定するために、円卓会議の意見等を大きく分類したものである。この段階では、まず今後の検討テーマを決める必要があるため、住民円卓会議の意見を、一旦、資料のように、「雇用」や「子育て環境」など大まかな項目に分類している。

- ・ 具体的には、資料の6ページ以降に示している。これは円卓会議で議論いただいた「地域の魅力」と「これからのまちづくりに必要なもの」について、意見を大まかな項目に分類したものである。6ページでは、「雇用」、「子育て環境」、「交通」といった「定住」に関するもの、7ページ、8ページは、「歴史資源」、「観光」、「地域資源の活用」といった「交流」に関するもの。また、9ページは「商業」、「地域コミュニティ」、「まちづくり」といった「活動」に関するものである。
- ・ このうち「活動」については、「定住」と「交流」の双方に関係することから、検討テーマについては、「定住の促進」と「交流の活性化」の2つに設定している。また、芸大の跡地活用の方向性については、この2つの議論を踏まえたうえで、まちづくりの方向性と合致した活用について検討していきたいと考えている。
- ・ 3点目の「具体的な方策の検討について」について説明する。資料2の11ページに、来年度以降のプロセスについて示している。第4回懇談会では、「定住の促進」と「交流の活性化」のグループに分けて議論していただく予定である。ただし、これらのテーマはでは議論の範囲が広すぎるので、個別テーマを設定して議論いただくのはどうかと考えている。「個別テーマ」の例としては、資料右下に示しているが、「定住」に関しては、「子育て環境」や「空き家対策」など、「交流」に関しては、「地域特産品のブランド化」や「西京区らしい観光」など、これまで懇談会や円卓会議での御意見も踏まえて挙げている。のちほど意見交換の際に、この「個別テーマ」についても検討いただきたい。
- ・ 第5回懇談会では、必要に応じて個別テーマを議論していただき、第6回ではメンバーを入れ替えて方策をブラッシュアップし、具体的な検討に移る。
- ・ 平成28年度は、平成27年度の議論を踏まえて取りまとめを行っていく予定である。

―事務局 別紙データマップ（人口マップ）に基づいて説明―
事務局

- ・ 前回の懇談会の意見を踏まえて、人口データを地図に落とししたものを作成した。地区によって特徴が違っており、こういった基礎資料にもとづいて議論をすることで活性化策などが出てくると思う。今後は具体的テーマに沿ったデータマップの作成を検討したいと考えている。説明は以上である。

会長：

- ・ 議論のポイント3「具体的な方策の検討について」の第4回のグループワークによる議論で、テーマ別にグループを分ける点が気にかかる。各委員にはそれぞれ得意とする専門の分野があり、グループを固定したままにするとその分野だけの議論になり、第6回のグループワークまで時間が空くことになる。それ

ならば、第4回で時間がかかってもグループの人を入れ替え議論すべきではないか。

委員：

- ・ 第4回目の懇談会でのグループワークでしっかり議論をして、時間をおいて第6回目の懇談会で2度目のグループワークをするのはいいと思う。その間に時間をおいているので各自考える時間ができる。
- ・ 前回の進め方については少し不満があったので、今回の提案された内容には満足している。芸大跡地の問題について核心に迫る議論も、大きな枠組みは話し合えば見えてくるのではないか。

会長：

- ・ 気になるのは、京都芸大が5年先には一部供用と新聞に出ていたこともあり、あまりゆっくりした話ではなく、すべてが終わってからでは跡地問題には対応できない。悠長せずにきっちりとした形で進めたい。
- ・ 議論のポイント1「今後の進め方」については、これでいいと思う。また平成27年度末に中間報告をするということについて了解いただけるか。意見がないようなので、このように進めていく。

(2) 今後の懇親会での検討テーマについて

会長：

- ・ 議論のポイント2「今後の懇談会での検討テーマについて」について、検討テーマが「定住」「交流」の2点に絞られたが意見はないか。

委員：

- ・ 今回は、データマップによって地域性がわかりやすくなった。地図を使ったデータ資料を常に出して頂きたい。

委員：

- ・ 各グラフでは目盛が統一されているので、桂坂もそんなに多くもなく、大枝も人口が少ない。

委員

- ・ 平成2年から22年にかけて、大枝で一戸建てだけでなくマンションが増えたため若い世代が増え小さい子供を見かけることが多くなった。新しく来られた世帯との交流や地域への参加をいかに増やしていくかが課題と考える。
- ・ 芸大のある地域とその隣接地は、田んぼや畑がある自然豊かな地域である。芸大が立ち退いた後の開発については、その自然を壊さないようにしてほしいというのが地元民の願いである。

委員：

- ・ このデータマップを見てみると、洛西NTと大原野の人口減少の問題に集約されていることがわかる。平成2年と平成22年の人口を比べると、洛西NTでは約10,000人、大原野では約700人の減少となっている。他の地域は増加かもしくは微減だが、この二つの地域の人口減少が著しい。空き部屋のデータはあるのか。

事務局

- ・ 今回はまだ調査はできていない。

委員：

- ・ 独自に行った調査では、市営住宅は2,700室中330室が空室であった。URは3,000室あるが、市営よりは空室が多いのではないかとの回答があった。市営より多いとなると、500～600件あるのではないかと推定される。

委員：

- ・ 市営住宅とUR合わせて800室の空部屋はかなり多い。800世帯とういと桂東学区の1/4になる。

委員：

- ・ 確認しておきたいが、「定住」とは夜間人口のことであり、「交流」とは外から来られた方と定住されている方の交流でいいのか。そう考えると、「活動」は「定住」と「交流」に分けて議論すればいいのか。それを一緒に議論すると、「活動」が議論されずに終わってしまう危険がある。

事務局：

- ・ 「活動」は「定住」と「交流」の双方に関係する話なので、切り離して議論するよりも一緒にご議論いただきたい。

委員：

- ・ 「交流」は昼間人口、「定住」は夜間人口ととらえられているのか。

事務局：

- ・ 人口の切り口で考えている。

委員：

- ・ 人口的にはそうとらえられると思うが、「交流」にあるテーマでも「定住」に持っていきたいものもある。
- ・ 「子育て」環境については、親にとって望ましい環境と子どもにとって望ましい環境は違っており、この違いが大事になる。福島の例では、子供が外で遊ぶことは必要と思っている保育所の園長がいるが、福島以外の放射能の危険がない地域でも外で遊ぶことが実施されていない。また、適当にけがをしたり、困ったことに遭ったりという「弱いリスク」は子供の成長にとっては大事だが、

今は建築等でそれができないようにしている。それは子供にとって望ましいことではない。

- ・ 郊外の住宅でも、このことが都市より実施できていない。親が車に乗ってドアからドアへと大型施設に乗り入れる方法をとっているため、子供は自然との接点がなくなっていることが「子育て支援」の名のもとに拡大している。社会との関係では、犯罪に遭わない環境を作っていく必要がある。
- ・ 土地の地域性とその土地に住むというメリットをクリアにしていく作業をすべきだ。

委員：

- ・ 「安全」の意味が異なっているということか。

委員：

- ・ 「子育て」に関する責任の問題が先行してしまっている。社会環境と地域環境の違いを考慮し、それぞれの地域で目標を持つことができるようになるかと思う。

(3) 具体的な方策の検討について

委員：

- ・ 資料2の11ページのテーマ例では、「定住の促進」は子育て環境や地域コミュニティなど住民が中心で、「交流の活性化」ブランド化や魅力発信など商店主等が中心に進めてきた。
- ・ 前回、紹介したラクセーナ託児サービスのように事業者と子育てサークルを行っている住民が連帯し子育て環境を高めたものや、洛西・大原野スイーツコンテストでは、料理の得意な地域住民が協力をして地域のブランド商品を作ることを目的としている。また、空家対策としては洛西NTの住民が中心に行ってきた。空き家の把握や、所有者へのアンケートなどを行っている。
- ・ このような流れを今後も大切にしていきたい。よって、「交流」のメンバーを住民、「定住」のメンバーを事業者というような棲み分けはせず連携を図っていく方法を考えた方がいい。

会長：

- ・ 住民だけでなく事業者からの両方の意見も欲しい。グループ分けしたところで、再度違うテーマで話す必要がある。

委員：

- ・ 住民と事業者が一緒に行えば連携するなどのいい案がたくさん出てくると思う。

委員：

- ・ それぞれの参加者の意見をぶつける方が良い。グループ分けは意見を出し合うためには必要だが、一つの形に決めつけてはならない。

事務局

- ・ 承知した。

委員：

- ・ グループワークは今の懇談会のメンバーで行うのか。

事務局

- ・ 懇談会のメンバーで行う。

委員：

- ・ 意見聴取は事務局が個別に聞きに行く等、どのような方法で行うのか。

事務局

- ・ 事務局としては円卓会議方式と考えている。
- ・ 意見聴取の対象の人選も含めた検討を第4回ぐらいまでに行っていきたい。例えば、子育て環境では大人の意見や子どもの意見をもっている方などについて聞いていきたい。

委員：

- ・ 第4回までにグループを分け意見を出し合い、発表するのか。

委員：

- ・ 第4回ではグループワークをして意見を出し合う。

委員：

- ・ 「定住」と「交流」というキーワードでは議論しにくいと感じる。我々が議論をする際には、「人（対象・主体）」、「もの（環境）」、「こと（何をするのか）」を分けて行う。「人」は誰に支援するのか・されるのか、「もの」は必要なもの・環境、「こと」は何をするのかになる。例えば、「定住」の「子育て環境」の場合、子育て世代を対象とするのか、それとも子供自体を対象とするのか、子供といっても乳幼児を対象とするのかそうでないかによって議論する内容が異なってくる。また、「交流」の場合でも、来てもらう人とは、誰のことを指すのかが分からない。住民以外の来てもらう人にとって、よい環境やどんなイベント企画をするのかがあると整理がつけやすい。
- ・ 緑枠の「定住」部分と青枠の「交流」部分は、「こと」で分けている。「人」で分けたほうがいいのではないか。議論がぶれないようにすると、集中しやすくまとめやすいと思う。今のままでは意見が偏ってしまう危険性がある。

会長：

- ・ そのとおりだ。「定住」といっても高齢者と子育て世代とではもちろんの内容が異なってくる。見方をきちんと整理したほうがいい。「誰を」ベースに「何を」求めているのか、という議論の方法をとるべきだ。

委員：

- ・ 子育ては「親子」、「安心・安全」は子供・高齢者が対象とわかっている。頭に

それを置いて意見を出すと整理がしやすい。先ほどの発言で、活動が切り取られないようにとあったがこれで理解できたと思う。

委員：

- ・ 「活動」については、どのようなデータを落とすかが今後の課題であると思う。

委員：

- ・ 活性化のミッションは何になるのか。よりいいミッションに向かうためにどうするのか。

委員：

- ・ 大きなビジョンを掲げずに、「定住」「交流」を共通のものとして捉えて議論を進めていくのがいいと思う。

委員：

- ・ 住み続けたい・来てもらえることを共通の基礎として議論をする方がいい。

委員：

- ・ 今現在人口の多いところも、また洛西NTのように人口が減少する。東山区も若い世代が全然いなくなった。そうならないように、人に来てもらえるためにはどうすればいいかに絞った方がいい。

委員：

- ・ 住んでもらうことを考えるのであれば、例えば、URの空家を見学しただけの人など住まないと決断した人の理由を聞いてはどうか。

委員：

- ・ 桂駅には不動産屋が山ほどあるが、洛西NTに不動産屋がない。駅がないのも理由の一つにはなる。ここに不動産屋があればアピールできると思う。

委員：

- ・ 1件だけある。新林の商店街につい最近できた。

委員：

- ・ 洛西NTなどの物件は、全国に店舗がある大手の不動産屋を使っているの、地元の不動産屋を使うことは少ない。

委員：

- ・ 基本的には、「住んでもらう」「来てもらう」をベースに話し合う方がいい。

委員：

- ・ データマップの中に地域の特色を入れるといい。来てもらうにしても、住んでもらうにしても、地域性を重視した意見が出てくるのではないか。また、地図の分け方がいいのかを確認していただきたい。7つくらいの分け方が限界だと思う。

委員：

- ・ 松尾や川岡などは旧学区で分けている。長い歴史的な背景の中から地域性の違

いが生じ、それによってこの分け方になっている。一つのいい形だと思う。

委員：

- ・ 保育園がどの地域にどれだけあって、学区がどのようになっているのか、バスがそれだけ走っているのかなどのデータを次回の懇談会までに欲しい。

委員：

- ・ 学区の背景を知っていたつもりだったが、旧桂学区がこれだけ分かれていたのを知らなかった。

委員：

- ・ 議論の上では、歴史的なものは無視できない。それぞれの地域に構造的な変化がある。たとえば桂東には阪急が駅を作り、家が建ちはじめ田畑が無くなった。そのため住民の層が違って来るなどが起こる。

委員：

- ・ 今回出してもらった資料で、子どもが減っていることがよくわかった。その事情を皆さんに知ってもらったうえで議論したほうがいい。西京区はこうすると単純にいわれると、大原野としては疎外感が出る。そうならないようなまちづくりの議論をしていきたい。

委員：

- ・ どの県で行われているかは覚えてないが、子供が少ない地域において、住民主催のコミュニティースクールが子供の支援を行ったところ、全国から不登校の児童などを抱えた若い世代がその地域に移住し始め、人口が増えたという事例を知っている。人口が少ないから単に増やそうと考えるのではなく、地域の良いところを子供に反映させることを考えることが大事ではないか。

委員：

- ・ 人口が少ない村で定住者が増えている例を私も聞いたことがある。強みを伸ばして定住者を増やしていくことは私も望ましいと思う。

委員：

- ・ 例えば、大原野地区の市街化調整地を解除し住民が増えたとしても、大原野が大原野でなくなってしまう、結果として人口も一時的な増加でまた減少してしまう。魅力のある地域を考え、何十年も続くようなまちづくりを考える必要がある。

委員：

- ・ 次の議論をしていくにあたって、今活動されている方の話を聞かせてもらえるとうれしい。

委員：

- ・ 地元でNPO活動を行っているが、その活動の1つ目は、タウンセンターを元気にするために、住民と事業主と一緒に、双方がWIN・WINになる方

向で動いている。たとえば、住居作りの専門家、地元の主婦、農家・農協の方などの多様な方の意見を聞いて、洛西の活性化のために若い人たちに来てもらう活動を行っている。ラクセーナの託児所もそうである。

- ・ 2つ目は、自然（西山・大原野の里）の活性化については、大原野で作っている獲りたての野菜を、どうやって、すぐに住人の口にかにいれるかを考えている。現在は直売所を試験的に行っている。さらに、大原野と洛西NTとが一緒になって、地域を愛せるような場所を作ろうということで、マルシェを毎月1回行っている。併せて、大原野をブランド化して、地域の特産品を作ってお土産として販売していくという仕組みを考えている。
- ・ 地域特産を住民の皆さんに知ってもらうためにスイーツコンテストを行った。今後も年1～2回程度行っていきたい。地域愛を育てたい。外から来た人が買って帰ってもらえるものとして、地域特産が必要。これは、食べ物だけでなく陶芸なども特産品になると考えている。これは物を売るだけでなく観光としてのPRにもなると考えている。
- ・ 先ほど他の方がおっしゃたが、大原野の魅力は、騒がしいものではなく、スローフード・スローライフが魅力。そういう魅力創りを合わせてやっていこうと考えている。

委員：

- ・ 一緒に考えたいと思う。ばたばたした買い物ツアーなどというのではなく、心が癒される観光が最高。それによって産業が生まれ人が活気づくというのが一番いいことである。

委員：

- ・ 地域の住民が地域のことを消費するという地産地消から、産業が生まれ、雇用が生まれる。小さなことでもこの循環が生まれればいいと思っている。これは、子育て世代に何とか来てほしいとの思いがきっかけである。

委員：

- ・ 子供たちにも喜んでもらえる、誇れる街にしたい。

委員：

- ・ 地域の人誇りを持てる街になれば人がくるのではないと思う。私は出身が富山であるが、いいものがたくさんあるのに、地元の人にはこれに気づいていない。外に出て初めてわかること。外の人がいいものだと言ってもらわないとわからない。地元の人がいい物であると自信をもち誇れるようになることからスタートする。

委員：

- ・ 居場所づくりや子育て支援について、社会福祉協議会においてどのような活動をされているのか。

委員：

- ・ 新林などNT内の各学区で子育て支援サークルを作って活動している。新林の場合は商店街内で行っている。境谷児童館や竹の里の集合住宅内にも子育て支援サークル活動がある。
- ・ 京都市主催の活動は新林など2か所でされている。

委員：

- ・ 学区ごとに色々やっている。賛助会費の募集の際には、高齢者だけでなく子育て世代の施策を打ち出さないと高齢者の方だけにお金を使っているように思われる。それと同様に居場所を考えるにあたっては、高齢者だけでなく子育て世代の居場所を考えないといけない。子育て世代のことを打ち出すにあたって、女性（母親）だけでなく、若い男性（父親）の居場所を作らないといけないと思う。悩み事を持ったままで解決できない若者がいる。3つに分かれた居場所をつくっていかないといけない。

委員：

- ・ 子育て支援の枠は、18歳までの子供を育てている母親が対象となるので、範囲が広い。乳幼児を抱えている方、小学生・中学生・高校生を抱えている方、みなさんそれぞれの思いで色々な学校に通わせている。
- ・ 子供たちを育てる環境に危険なことがたくさんある。たとえば、芸大の近くの細い危険な通学路を30分ぐらいかけて学校に通わせているところもある。このような子供をもつ母親は心配を抱えているだろう。
- ・ 高齢者の支援のひとつに、「教育＝今日いくところがある」、「教養＝今日用事がある」という施策がある。それをするためには、高齢者に行事を知らせる必要があるが、新林では毎月テレビで行事の予定を広告し、自治会に入っておらず、回覧文書を見ることが出来ない人にもわかるようにと保健所等にポスターを掲示させてもらっている。

委員：

- ・ 全学区ではできていないが、学区ごとに支援がある。1箇所できればいいというわけではない。距離があれば歩けないからだ。
- ・ 洛西NTでは1クラスの学校が多い。将来統合になってしまえば歩いて通えなくなる。そういうのを考えていないといけない。小中一貫校を作るべきだという話が出ているのもそれがあつた為だ。魅力を作るしかない。

(4) アンケート調査について

会長：

- ・ 最後に、先日報告したアンケート調査について事務局から説明をお願いします。

事務局

- ・ 資料3に示す通り，芸大移転に係るアンケート調査を実施する予定である。時期は，平成27年3月下旬と記載されているが，30日を予定している。対象は，芸大の下宿生が多く住む，洛西支所管内の飲食店233軒に対して行う。次のページにアンケート用紙を添付している。アンケート結果については，来年度第4回の懇談会で報告したい。

(5) その他

会長：

- ・ アンケートについて意見がないようなので，最後に全体を通して何かあるか。

委員：

- ・ 小さな活動を行っている人がたくさんいる。その人たちに話を聞くと，上手くいっているように見えていても身銭をきっているため続けられていない人も多い。初めは補助金で始めることができても，次のステップに移行する段階で補助金の枠外となり，身銭を切らざるを得ない。自分でリスクを負っている人が続けられる支援を考えていかないといけない。このような人たちにインタビューをして，どのような活動を行っているのかを聴き，問題点を拾い上げてどのような支援をするのか，それをベースにして議論する方が，きちんとしたビジョンができると思う。円卓会議はすごく重要だが，登場人物は住民だけではない。
- ・ 個人的には，次のステップに移行するためには，そういう活動している方同士の連携や，事業者と結びつける方法がいいと思っている。ただ，NPOが一部やっているものの，今はその仕組みがないので，そういう仕組みが必要だ。

委員：

- ・ 確かにいい活動している人はたくさんいる。いい活動ができている人を分析しないと我々が行っても同じことになる。頑張っている人をピックアップすることが大事だ。

委員：

- ・ 西京区に人を呼んでくる仕事をしているので，具体的な方策が決まったら，事例などを提案できると思う。

委員：

- ・ (今後の進め方について) 活性化のビジョンは平成28年では遅いと思う。平成27年に確認を取った方がいい。
- ・ 「定住」「交流」という枠組みでまとめているのであれば，細かい議論を続けるのではなく，この枠組みで議論すべき。
- ・

委員：

- ・ 細かく議論すると全体がぼけてしまう。
- ・ 先日、京都新聞に残念な気持ちになった記事が掲載された。洛西口と桂川の高さ制限をなくし、商業地区にするという記事であった。コンパクト化と書かれていたが、一極集中化の方向に向かっていると感じる。
- ・ 西京区には交通システムがないが、それを作っただけでは、こちらに魅力あるものがなければ人は来ない。一方だけに力をいれていると、そっちに人が流れてしまい、こちらには人が来ない。

委員：

- ・ 洛西NTには今年の秋にニトリが出店する予定となっているので、流れが変わってくると思う。イオンの客層と洛西NTの客層を変えないといけないと思っている。あちらは子育て世代が中心だか、洛西NTは高齢者をターゲットにし、1/4カットの白菜を売るなど地域ニーズに合わせたやり方をしていくことで対応策があると思う。
- ・ ひとつ形になりつつあるのが、ゆるキャラグッズ。ゆるキャラの経済効果は年間1,000億ぐらいあると聞いているので、軽く見られないと思っている。これが軌道に乗れば、洛西の魅力になる。
- ・ 併せて、地産地消の商品をきっちり販売し、地域の商品をもっとPRする場を提供するのが企業使命だと思っている。埋もれているものを発掘して展開していきたい。たとえば、大原野神社のかぐや姫のみそは本当に売れている。高島屋には平日で8,000~9,000人、休日で12,000人のお客様が来るので、そのお客様に地元の商品をPRし、地域社会が潤う場を提供したいと思っている。
- ・ 他の方も色んな活動をされていると思うので、またレクチャーしてほしい。

委員：

- ・ 大原野のみそを売るだけではなく、次においしく使う方法も提案したら横に広がると思う。
- ・ できることなら交通システムができればいいなと思っている。バスでは弱い。LRTとかを走らせてほしい。他の地域に人がNTに来やすいようにしてもらおうと違ってくると思う。

委員：

- ・ かつて循環バスの検討をしたが財務面で実現しなかった。NPOで特産品を開発し、その利益でバスを運用するといったように、お金が地域の中で回っていくような仕組みにすべき。そういう意味でも特産品が必要だ。

委員：

- ・ みんな色々なアイデアを出し合う必要がある。具体的に何ができるかを色々考えている。1時間に1本しかないバスを、逆の発想で、それをツアーにして観光にしてはどうかと思っている。そういうひとつひとつの案を具体化してくしか方法がないのではないかとと思っている。

委員：

- ・ その案はとてもいいと思う。住民はあまり遠出をしていない。先日、高齢者の食事会の際に、送迎のバスにゆっくり遠回りしてもらって紅葉やイチョウ並木を見られるルートを通ってもらったところ、高齢者の方に本当に喜んでもらった。高齢者の方は30～40年地域しかでていない方が多いので、新鮮に感じられたのだと思う。高齢者だけでなく子育て世代もあんまり遠出はしていない。地域性をわかってもらうためにもその案はいいと思う。

会長

- ・ 地域の良さをわかってもらい、そこに地域の産業をどうかましていくかを考えれば、他所にはできない西京区だけしかできるのではないかとと思う。
- ・ それでは、これで「第3回西京区・洛西地域の新たな活性化懇談会」を終了させていただきます。

以上